

日本語における時間と現実性の相関関係：「仮定性」の意味的根源を探って

著者	ヤコブセン ウェスリー・M
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
号	5
ページ	1-19
発行年	2011-06
URL	http://doi.org/10.15084/00000562

日本語における時間と現実性の相関関係

— 「仮定性」の意味的根源を探って—

The Interrelationship of Time and Realis in Japanese—in Search of the Semantic Roots of Hypothetical Meaning

ウェスリー・M・ヤコブセン (Wesley M. Jacobsen)

ハーバード大学 (Harvard University)
国立国語研究所 (NINJAL) [2010.08–2011.03]

《要旨》日本語では仮定性や反事実性といったモーダルな意味が状態性や反復性など、未完了アスペクトに関わる時間的な意味を表す言語形式によって表現される場合が少なくない。こうした相関関係は、仮定的な意味が典型的に生じるとされる条件節などの従属的な環境においてのみならず、可能性、願望、否定といった意味が主文に表れた場合にも観察される。本論では、Iatridou (2000) で提案されている過去形の「除外特徴 (exclusion feature)」に対して、未完了アスペクトの「包含特徴 (inclusion feature)」を提案し、以上の相関関係の説明をこの特徴の働きに求めてみた。それによると、未完了アスペクトには、話者の視点である基準時以外の時点までも想定されるという時間的な特徴が本質的に備わっており、これが転じて、話者の世界 (現実の世界) 以外の可能世界までも想定されるという解釈へと拡張することによって仮定的・反事実の意味が生じるとする。インド・ヨーロッパの諸言語では、反事実性の意味表出に過去形が関わっている現象がこれまでにたびたび指摘されてきたが、少なくとも一部の言語では、反事実性、ひいては仮定的な意味一般の表出に、テンスとは補完的な形でアスペクトも重要な役割を果たしていることが、日本語のこうした諸現象の検証によって明らかになる。人間にとって現実性の把握に、時間の把握がどんなに深く関わっているかをうかがわせる現象として注目に値する。

Abstract: Japanese exhibits numerous phenomena where the expression of hypothetical and counterfactual meaning is mediated by linguistic forms having the basic function of expressing temporal meaning such as stativity and iterativity (both subcategories of imperfective aspect). This correlation is seen not only in hypothetical meaning associated with subordinate conditional clauses, but also in main clause contexts with predicates expressing possibility, desire, and negation. An explanation is sought for this correlation in an “inclusion feature” of imperfective aspect, modeled after an analogous “exclusion feature” of past tense proposed in Iatridou (2000), whereby imperfective aspect is seen to bear reference to multiple points in time beyond the time of reference adopted by the speaker. This inclusion of points in time outside of the time of the speaker extends naturally to inclusion of reference to possible worlds outside of the world of the speaker, giving rise to hypothetical meaning in general, and counterfactual meaning as a special case of such meaning. While the role of past tense has received significant attention as a medium for counterfactual meaning in Indo-European languages, this paper urges that attention also be given to aspectual meaning as a complementary, but equally central, medium exploited by some languages for the expression of hypothetical meaning, pointing to a fundamental cognitive link between the perception of time and the perception of reality in human language.

人間には、実際に存在している事態を把握するだけでなく、まだ存在していない事態、または存在する見込みのない、完全に現実を離れた事態までも想像できる能力が備わっており、そうした能力が言語形式にも様々な形で反映されている。ただ、現実・非現実の区別がどのような言語形式によって表現されているかを調べると、現実性の度合いそのものを意味するものによって直接的に表現される場合よりも、むしろそれとは意味的に離れているように見える言語形式によって間接的に表現される場合が多い。そうした言語形式の中でとりわけ大事な役割を果たしているのが、時間に関わる様々な表現であり、人間にとって現実の把握が、時間そのものの把握といかに密接に関わっているかを物語っている。日本語は、こうした時間と現実の度合い（モダリティー）の相関関係を裏付ける現象を豊富に提供する言語である。本論では、そうした現象をいくつか考察した上で、時間と（非）現実性という、一見異質のように見える意味範疇の間に、なぜこのような関連性が見られるのかについて、分析を提案した上で、「仮定的」な意味、特に現実性の度合いが低いと考えられる「反事実的」な意味の根源をこの観点から探ることにする。

1. 現実以外の事態への言及一主文の場合

まず、主文において、現実の事態と現実以外の事態への言及が対照的に出ている例として、(1)–(5)を見ていきたいと思う。(1)では過去において、実際に生じた事態が、(2)では未来の事態で、発話の時点では実現していないが、話者にとって、いずれ確実に実現すると判断される事態が述べられている。

- (1) 課長は風邪で早めに家に帰った。
- (2) 今度の連休に久しぶりにうちに帰る。

一方、(3)–(5)は、いずれも何らかの意味で、現実以外の事態への言及がなされている例である。

- (3) もう疲れた。うちに帰りたい。
- (4) 今日は特に残された仕事がないので、いつでもうちに帰れる。
- (5) もう夜12時をすぎたのに、子供がうちに帰ってこない。心配だ。

(3)、(4)では、接尾辞「～タ (イ)」、「～エ (ル)」の付加によって、「うちに帰る」という事態が成立するのが、現実の世界においてであるという可能性は除外しないまでも、必ずしも現実の世界ではないという意味になっている。一方(5)では、接尾辞「～ナ (イ)」の付加によって、「帰る」の成立が現実の世界においてであるという可能性が明示的に除外されている。ここで、「可能世界」という概念を適用すれば、(3)–(5)は、現実の世界が明示的に除外されているかどうかは別として、いずれも現実の世界以外の「可能世界」が想定されており、現実の世界のみが意味の対象になっているわけではない、という点で

(1)–(2) とは対照的である。つまり、(1)–(2) では、現実世界という一つの世界が唯一意味の対象になっているのに対して、(3)–(5) では、現実の世界以外までを含めた複数の可能世界が意味の対象になっているということになる。

ある事態がある世界において生じるということは、少し観点を変えれば、その事態を表す命題（たとえば「うちに帰る」）がその世界において「真」であるということでもある。現実の世界に焦点を絞れば、そこで「真」になるかどうかを話者が特定できない命題、あるいは最初から現実の世界において「真」ではなく、「偽」と判断している命題を、(6) のように、「仮定的命題」と定義することにしよう。

(6) 仮定的命題とは発話時において、現実の世界においてそれが真であるかどうか不確かであるか、または偽であると判断される命題のことである。

このように見れば、(3)–(5) では、「うちに帰る」が一種の「仮定的命題」であるということになる。「仮定的命題」という概念は、通常は条件文の前節のような従属節に現れるものに適用されるため、(6) のように、主文も含めたより広い環境に現れる命題について適用するのは、多少不慣れな感じがするかもしれないが、後ほど取り上げる条件文の意味との関連性において、このように定義する意図がより明らかになるだろう。

さて、「～タ (イ)」、「～エ (ル)」、「～ナ (イ)」の付加によって、現実の世界以外の可能世界が想定されるというモーダルな意味が加わることは以上見てきた通りであるが、次にこのような接尾辞が時間的な性質の面から見て、どのような特徴を持っているかについて見ていきたい。ここで使われている「帰る」は、ある状態から他の状態への変化、詳しくいえば「特定の場所（例えば、「うち」等）に存在しない状態から、そこに存在する状態への変化」を表すものとして、ある出来事の発生を表す述語である¹。一方、「帰りたい」「帰れる」「帰らない」は、一定の期間中、ある事態が変化せず続くという状態を表すものである²。出来事性（非状態性）のある述語と、状態性のある述語の違いは、様々な文法上の振る舞いによって確認できるが、ここで一つ例を挙げると、非過去形（～ル／ウ、～イ、～ダなど、過去形の付加されていない形）のまま文末に現れると、テンスの違いが生じることである。同じ非過去形でも出来事性の述語は、未来の意味を、状態性の述語は現在の意味を、それぞれ表すのである。例文 (2)–(5) について言えば、(2) の「帰る」という出来事は発話時より後に成立する、未来の解釈を受けるところにその出来事性が確認され、一方「帰れる」という可能性、「帰りたい」という願望、「帰らない」という事態の欠如はそれぞれ発話時そのものにおいて成立しているところにその状態性が確認される。「～タ (イ)」、「～エ (ル)」、「～ナ (イ)」の状態性は、テンスの解釈のほかにも、目的語を表す格助詞の変化の可能性（本を読む → 本が読める、本が読みたい³）、幅を表す

¹ 金田一 (1950) の分類では「瞬間動詞」、Vendler (1957) の分類では、achievement verb, accomplishment verbに相当するもの。

² 金田一 (1950) の分類では「状態動詞」、Vendler (1957) の分類では、state verbに相当するもの。

³ 否定形「～ナ(イ)」では、目的語にはこうした助詞の変化が見られない（本を読む → *本が読まない）。こ

時間副詞と共に共起可能であること（3時に帰る → あと3時間は帰らない）などによっても確認できる。さらに、「～タ（イ）」、「～エ（ル）」が、本質的に状態性を持つ形容詞と同じように活用する（帰りがたかった、帰りがたくて、帰りがたくない、などのように）のも、その状態性を裏付ける形態上の特徴と言えるだろう。

以上のように、「～タ（イ）」、「～エ（ル）」、「～ナ（イ）」など、主文において現実の世界以外の可能世界を想定させるというモーダルな意味合いを表す典型的な言語形式には、同時に状態性という時間的性質が伴われる傾向がある。少なくともこの三つの接尾辞に絞って言えば、非現実性と状態性との間に、何らかの関連性があるように見える。しかし、(7)–(8) のような例からも明らかのように、状態性の意味がそのまま非現実性の意味につながるわけでもない。

(7) テーブルの上に本が3冊ある。

(8) 東京は日本の首都だ。

(7)–(8) では、述語が歴然とした状態を表しているのにも関わらず、言及されている事態は紛れもなく現実の事態であり、何も現実以外の世界を想定しているわけではない。とすると、「～タ（イ）」、「～エ（ル）」、「～ナ（イ）」に見られる状態性と非現実性の共起は、偶然にすぎないものなのだろうか。それとも、完全にその意味が同一であるとは言いなくても、状態述語には非現実的な解釈を引き出す何らかの意味的要素が潜んでいるのだろうか。その問いに答えを提案する前に、仮定性と状態性の関連性が日本語ではどれだけ一般的な現象であるか、今度は従属節も視野に入れて考察することにしよう。

2. 現実以外の事態への言及—従属節の場合

現実以外の事態への言及がなされる典型的なものとして挙げられるのが条件文である。条件文とは従属節（前件、または条件節）と主文（後件）という二つの節が、「～たら」その他の条件接続詞によって繋げられる構文で、(9) のようにどちらの節も、言及される事態が真であるかどうか不確かで、「仮定的」な解釈を受けるのがその基本的な意味であるとされている。

(9) 雨が降ったら試合は中止になる。

この場合、主文に仮定的な解釈が生じるのは、今まで見てきたような「～タ（イ）」、「～エ（ル）」、「～ナ（イ）」のような言語要素が主文中に一切ないことから、主文に先立つ条

のことからも分かるように、「～タ（イ）」、「～エ（ル）」、「～ナ（イ）」の間にその状態性がどのような形で現れるかに多少差が見られる。これは「～ナ（イ）」という接尾辞そのものの状態性の欠如というより、動詞+接尾辞全体が、もとの動詞の出来事性をどの程度受け継ぐことが許されているかという、統語論上の「透明性」の程度の差に由来する現象と考えられる。詳しくはJacobsen (1996) を参照。

件節の影響であることが明らかである。(9)の意味が仮定的であることは、「もし」という副詞と問題なく共起することからも明白であろう。

(10) もし雨が降ったら試合は中止になる。

ところが、「～タラ」による、いわゆる条件文の中には、「もし」を伴いやすいもの、伴いにくいもの、伴い得ないものなど、色々あることから分かるように、仮定性の程度が一律ではない。

(11) 田中君に会ったらよろしく伝えてくれ。(もし)

(12) この仕事が終わったら飲みに行く。(?もし)

(13) 来週になったらもう少し暇になる。(*もし)

(13)では、「来週になる」という、まだ現実にはなっていないものの、話者にとって確実に成立すると判断される、現実に近い内容が前件になっている。さらに言えば、「～タラ」文の中には現実に近い事態というより、現実そのものを表す、(14)のような例もある。

(14) 薬を飲んだら元気になった。(*もし)

(14)のような例を、蓮沼(1993)その他に従って、「～タラ」文の事実的用法と呼ぶことにしよう。「もし」と共起可能かどうかを、言及される事態の仮定性を計る手がかりとすれば、「～タラ」文の仮定性には、(10)、(11)のような仮定的な用法から、(14)のような全く仮定性のない用法まで、その度合いに差が見られることになる。ちなみに、仮定的用法・事実的用法の両方を持つのは「～ト」によってつなげられる複文の特徴でもあり、日本語のいわゆる条件文に広範囲に見られる現象である。

(15) 火事が起こると大変なことになる。(もし)

(16) 薬を飲むと元気になった。(*もし)

(14)、(16)のような事実的用法を条件文として認めるべきかどうかをめぐっては研究者の間で意見が分かれているが⁴、「～タラ」、「～ト」によって導入される節の仮定性には度合いの差があるということだけは明らかであろう。

さて、「～タラ」、「～ト」文に見られる、以上のような仮定性の度合いを左右する意味的要因としてはどのようなものが考えられるだろうか。仮定性の度合いは、話者が言及の

⁴ こうした事実的用法を条件文として認めない立場が、条件文の研究の中では主流をなして来た考え方と言える。その代表的なものとしてAkatsuka (1985)、坂原 (1985)、有田 (2007)を参照。逆に事実的用法まで条件文の一種として認める立場としては、ヤコブセン (1990)、益岡 (1993)、Jacobsen (1999)を参照。

事態を現実のものとしているかどうか、によって左右されると言えばそれまでであるが、むしろここでは、話者のそのような見方の違いを支える言語的要因として何があるか、ということに焦点をあてて考えたいと思う。そういった要因の中に、テンスやアスペクトといった時間的な意味を表すものが、実は大いに関わっているのである。

まず、テンスに関して言えば、過去において起こった事態の方が、発話の時点ではまだ実現していない未来の事態よりも現実として捉えやすいことは言うまでもない。もちろん、(10)–(14) で見たように、おなじ未来でありながら、ほぼ現実に近いとみられる事態から、生じる確率が全く不確かな事態まで、様々であるが、いくら生じる確率が高いように見えても、ある程度の仮定性が保たれていることは、「～たら」、「～と」に並ぶもう一つの条件接続詞の「～ば」の振る舞いによって確認できる。「～ば」によって導入される事態が、この三つの条件接続詞の中で、少なくとも現代日本語では、最も仮定性の高いものであることは、「～たら」、「～と」と違って、「～ば」には事実的用法がないことからまず確認できる。

(17) *薬を飲めば元気になった⁵。

また、(18) のように、同じ構成節を「～たら」と「～ば」でつなげた場合、「～ば」の方が、言及事態の実現する確率が低いという解釈を受けやすいことも「～ば」の本質的な仮定性を裏付ける。

(18) この仕事が終わったら／終われば飲みに行く。

さて、未来の事態が本質的にある程度の仮定性を孕んでいることは、どんなに言及事態の生じる確率が高くても、未来である限り「～ば」の使用が許容されることから分かる。

(19) 来週になればもう少し暇になる。(*もし)

(20) 春になれば桜が咲く。(*もし)

一方、過去の事態は、未来と違って、通常、現実として捉えられるため、逆にその仮定性の度合いが、(21) のようにゼロと言ってよいほど低くなるのが普通である。

(21) 薬を飲んだら／飲むと元気になった。

ただし、話者の視点によっては、ある出来事が実際、過去に起こったかどうか分からない(22) のような場合や、現実には起こっていないと分かっている(23) のような反事実的

⁵ (17) が非文法的と判断されるのは、文末に「ダロウ」、「ノニ」、「ハズダ」などの要素が来ない、事実的な解釈を想定してのことである。

な場合もあり、過去形であるというだけでその仮定性の度合いが低いと一律的に言えるわけではない。この場合、過去文でも、仮定性の度合いが高い「～バ」が許容されることに注意されたい。

(22) 薬を飲めば元気になった（はずだ）。

(23) 薬を飲んでいれば元気になっていた（のに）。

以上のように、時間的な意味に関わる言語形式として過去か未来かというテンスの区別が条件節の仮定性の度合いを左右する一要因になっているが、未来文・過去文それぞれの中でも仮定性の度合いに差が見られ、仮定性の度合いを決定する上でテンス以外の要因が働く余地が大きく残されている。

時間に関わる、もう一つの言語範疇であるアスペクトも、条件文の仮定性を左右する一要因として関わっているのだろうか。第1節では、主文における仮定的な表現に状態性の意味が伴いやすいことを見て来たが、実は条件文においても状態性が仮定性の度合いの向上につながると思われる現象が少なくない。ここではそうした現象を4つほど取り上げることにする。まず第一に、未来の条件文において状態性のある述語の方が出来事性のある述語より仮定性の高い解釈につながる傾向が強いことが挙げられる。例えば、(24)–(25)にあるように、意味上類似している「暇になる」と「暇がある」とでは、状態性のある「暇がある」の方が、出来事性のある「暇になる」⁶より、事態の生じる確率が低く、実際「遊びに行く」かどうかより不確かと言えよう。

(24) 暇になったら遊びに行く。

(25) 暇があったら遊びに行く。

第二に、「～たら」、「～と」の事実的用法において、前件の従属節の述語には、(26)–(28)にあるような出来事性のあるものもっぱら要求され、(29)–(30)のような状態性のある述語は許容されない。

(26) 外に出たら／出ると雨が降っていた。

(27) 見た目にはまずそうだったが、実際食べたら／食べると案外おいしかった。

(28) 走ったら／走ると息が切れた。

(29) *お金があったら／*あると、友達がたくさんできた⁷。

(30) *若かったら／*若いと、ある日願ってもない仕事にありついた。

ただ、久野（1973）でも指摘されているように、状態性のある事態には、恒常的な状態か

⁶ 「暇になる」はVendler（1957）の分類ではachievement類に相当するもの。

⁷ 例文（17）と同様、(29)が非文法的と判断されるのは、文末に「ダロウ」、「ノニ」、「ハズダ」などの要素が来ない、事実的な解釈を想定してのことである。

ら一時的な状態まで、様々な程度があって、比較的変わりやすい一時的な状態であるほど、事実的用法が許容されやすくなる傾向が見られる⁸。

(31) お金がなくて困っていたら／いると、ある日願ってもない仕事にありついた。

(32) 職員室にいたら／いると先生に注意された。

(33) ?指をドアに挟まれて痛かったら／痛い、花子が丁寧に包帯で巻いてくれた。

いずれにしても、仮定性の最も低い、条件文の事実的用法において、恒常的な状態を表す述語が許容されないのは、仮定的な意味につながりやすい要素が状態性に備わっているからだと考えられる。

第三に、仮定的な性質が強い「～バ」の振る舞いにも、状態性と仮定性の関係をうかがわせる現象が見られる。出来事性のある述語の場合は、「～バ」の後件に、依頼、命令などが許容されないのが普通であるが、状態性のある述語の場合にのみそうした制約が緩められる。

(34) *田中君に会えば、よろしくお伝えください。(例文(11)と比較されたい)

(35) 暇があれば/*暇になれば、遊びに来てください。

(36) 寒ければ/*寒くなれば、家の中に入ってください。

「～バ」文のこうした振る舞いには、アスペクト以外の意味的、語用論的な要素が同時に働いているにしても、条件接続詞の中で、最も仮定性の高い「～バ」が、出来事性述語より状態性述語と共起する方が制約が緩いという事実は、少なくとも今まで見てきた状態性と非現実性の関連性と一致する現象と言えるだろう。

第四に、以上見てきたアスペクトとモダリティーの関連性を裏付けるもう一つの現象として、完全に現実を離れた事態、つまりその真理値が「偽」と判断される「反事実」的な事態の言語形式が挙げられる。「反事実性」という意味は、往々にして過去形の文に現れるものと思われがちであるが、実は、(37)のような過去の事態をさす場合だけでなく、(38)のような現在の事態、(39)のような未来の事態をさす場合にも生じうる。

(37) もっと早くうちを出れば／出たら電車に間に合ったのに。

(38) 曇っていなければ／なかったら星空が見えるのに。

(39) 薬を飲めば／飲んだら元気になるのに。

(37)–(39) では、話者はそれぞれ「もっと早くうちを出た」、「曇っていない」、「薬を飲む」という過去、現在、未来の事態を実際には生じていない、または生じないものと見ており、

⁸ 恒常的な状態と一時的な状態の違いは基本的にはCarlson (1989) のいう individual-level predicate/stage-level predicate の違いと軌を一にするものと考えられる。

どれも反事実的な事態である。(39)のような未来の事態では、未来であるというだけで過去、現在の場合より仮定性の度合いが高くなることは、例文(19)、(20)に関して見た通りであるが、(39)では、ただ単に言及の事態が実現するかどうか不確かであるという通常の未来条件文の仮定性の度合いよりも、完全に現実の世界を離れたという、より程度の高い仮定的な解釈を受ける。

こうした反事実性に伴う形式的特徴としては、日本語では文末に「ノニ」、「ダロウ」、「ダロウニ」などのモーダルな終助詞が伴うこと、また本来なら過去の条件文に現れることができない「～バ」が過去文でも可能になることなどが挙げられるが、実は非現実性に伴いやすい状態的アスペクトも、ここでまた顔を出すことが多い。例えば、同じく反事実的な解釈が可能である、(40)と(41)を比べて見ることにしよう。

(40) 薬を飲めば元気になっただろう。

(41) 薬を飲んでいれば元気になっていただろう。

(40)–(41)とも「薬を飲む」事態が実現しなかった、つまり、「実際には薬を飲まなかった」という反事実的な解釈が成立しないでもないが、(40)では、話者が実際「薬を飲んだ」かどうか分からないという、中立的な解釈の余地が残されているのに対して、(41)のように前件・後件ともに「～テイル」の形式になると、中立的な解釈は得られにくく、純粋に反事実的な解釈しか許容されなくなる⁹。一般的に言って、過去の反事実条件文、つまり過去の事態を、現実を完全に離れたものと見る条件文では、前件・後件ともに出来事性の述語を「～テイル」の形で表す傾向が目立つ。

(42) もっと早く起きていれば、電車に間に合っていたのに。

(43) ちゃんと勉強していれば、試験に受かっていただろうに。

一方、(44)の前節にある「である」や(45)の後節にある「できる」のような状態性のある述語の場合、そもそも「～テイル」の形にならず、その本質的な状態性を持ったまま、反事実条件文に現れうる。

(44) お金持ちだったら、いっぱい友達ができただろうに。

(45) 法隆寺がもしヒノキ以外の木で作られていたら、おそらく今のように昔の姿を現在まで伝えることはできなかつただろう。

ちなみに、同じ「できる」でも、(44)の後節にあるような出来事性のもの、(45)の後節にあるような状態性のものの2種類あることに注意されたい。

⁹ (40)では「ノニ」、または「ダロウニ」という終助詞で締めくくった方がより座りがよくなるのも、そのためであるが、「ダロウ」だけでも充分反事実性は読み取れるだろう。

さて、(42)–(45)に見られる「～テイル」はどのような性質のものだろうか。ここに出てくる動詞の中には、金田一(1950)の伝統的な分類でいう、「勉強する」のような継続動詞(Vendler(1957)のactivity類)、「起きる」、「受かる」、「(友達が)できる」のような瞬間動詞(Vendler(1957)のachievement, accomplishment類)など、様々な種類のものがあるが、「～テイル」が共起する動詞の種類によって通常、主文が受ける動作進行中、結果状態といった解釈の区別はこの場合生じない。ただ、そうした解釈の区別そのものは中立化されても、「～テイル」本来の、変化を伴わない状態性という性質には変わりはない。とすれば、状態性のある言語形式が、ここでまた仮定性の向上、とりわけ仮定性の高い反事実的な意味解釈につながっていることになる。

以上のように、言及される事態が実現するのは、必ずしも現実の世界においてではない、あるいは現実の世界以外の世界においてであるという、仮定的な解釈が前面に出てくるにつれて、述語がより状態的な性質を帯びてくるという傾向は、主文・従属節を問わず、日本語では広範囲に見られる傾向であり、単なる偶然とは思えない。時間と現実性の間には、なぜこのような関連性が見られるのだろうか。まず、その手がかりを提供すると思われる、状態性の時間的特徴を、次節で探ってみることにする。

3. 状態性における時間的複数性

状態性アスペクトとは、ある事態を時間の流れに沿って変化せずに存在するものとして捉え、言い換えれば、その事態の内容を、どの部分をとってみても、他の部分とは性質の変わらない、均質性のあるものとして捉えた見方である。変化を伴わず、均質性を持つという点では、何らかの変化を伴うものとして捉えられる、出来事性のある事態とは根本的に性質を異にする。出来事性と状態性のこうした対立は、同時に西洋のアスペクト研究の伝統で中心概念の座を長らく占めて来た、完了・未完了アスペクトの対立に通ずるところもある。出来事性アスペクトが、ある事態を、ひとまとまりをなす全体として見る完了アスペクトの典型的な下位範疇であるのに対して、状態性アスペクトは、反復性、習慣性といったアスペクトと並んで、未完了アスペクトに属する種類である。

状態性のある述語と出来事性のある述語の違いが、テンスの解釈やその他の文法上の現象に現れることは、第1節で見た通りである。例えば「3時間」のように時間の幅を表す時間副詞と、「3時に」のように幅を持たない瞬間を表す時間副詞のどちらと共起しうるかでその違いが反映されている。

(46) 3時に／*3時間 京都に着いた／患者が死んだ／授業が始まった。

(47) 3時に(私がうちに帰って来たときに)／3時間 花子はうちにいた／車はガレージの中にあった／正面玄関のドアがあいていた。

状態の変化そのものを表す、典型的な出来事性の動詞「着く」、「死ぬ」、「始まる」などは、(46)のように、瞬間を表す副詞と共起しやすいのに対し、幅を表す時間副詞とは共起し

にくい。一方、状態性のある述語「いる」、「ある」、「～ている」などは、(47)のように、それ自体均質の、時間的幅のある事態を表すにしても、どちらの種類副詞とも共起しうる、より緩やかな性質を呈している。Klein (1994) で指摘されているように、(47)の「3時に」、「3時間」のような時間副詞は言及の事態そのものではなく、話者の視点になっている基準時をさすものであるとすれば、状態性のある事態は、瞬間的な視点、時間の幅のある視点のどちらからも捉えることが可能であることになる。瞬間的な視点から捉えうるのは、「うちにいる」などのような比較的変わりやすい状態だけではなく、川端康成の「雪国」の有名な冒頭の文や(49)のような、恒常的な状態についても同様である。

(48) 長いトンネルを抜けると、そこは雪国だった。

(49) 廊下ですれ違った人は、よく見ると、太郎だった。

ところで、同じくKlein (1994) で指摘されている通り、(48)–(49)の過去形がさしているのは、言及事態が過去のものであるというより（「その人が太郎である」こと、「そこが雪国である」ことは現在でも変わりはないはずである）、話者の視点になっている基準時そのものが過去になっていることであり、それが「トンネルを抜けると」、「よく見ると」などによって指定されている瞬間的な時点である。なお、(50)–(51)のように過去形を取り除いて現在形にすると、今度は基準点が発話時という、話者にとって最も近い瞬間と重なる結果になる。

(50) そこは雪国だ。

(51) その人は太郎だ。

ただ、(48)–(51)のいずれにおいても、たとえ状態性のある事態を瞬間的な基準点から捉える場合でも、言及の事態がその瞬間のみに限られて存在するのではなく、その瞬間を囲む、幅のある期間にわたって持続するという解釈が常に伴う。言い換えれば、状態性は、話者の視点以外の時点を常に含むという性質のものなのである。この点、(46)における「京都に着く」等の状態変化の出来事が「3時に」という瞬間以外には成り立たないと対照的である。出来事性の事態と違って、状態性の事態は、話者の基準点以外にも複数の時点を含む性質のものなのである。

4. 仮定性を導きだす過去形と未完了アスペクトの相互補完的な働き

ここでしばらく日本語をわきにおいて、日本語以外の言語では非現実性がどのような言語形式によって表現されるかについて見てみよう。現実性の度合いが低い、仮定的な事態を表す機能を持つ言語形式として、しばしば指摘されるのが過去形である。過去形と非現実性の関連性について、特に示唆に富む分析を提供しているのは、Iatridou (2000) である。Iatridouは英語とギリシャ語において、言及されている事態の話者にとっての近さ (Iatridou

過去形の除外特徴 (ExclF):

Topic (x) (当面の話題になっているx) はS(x) (発話時における話者のx) を除外する。
xは時間、可能世界の両方にわたる変数である。

このようなテンスと非現実性の両方の意味を示す過去形の働きが、日本語にも見られないでもない。例えば、(56)–(57) のように、現実以外の事態に言及する反事実的な条件文では、過去形「～タ」をもって現在の事態をさす場合もあれば、未来の事態をさす場合さえある。

(56) 3時間前に薬を飲んでいけば、今頃効いていただろうに。

(57) 1時間前に薬を飲んでいけば、2時間後に効いていただろうに¹¹。

ただ、(52)–(54) のギリシャ語の例からも、第1, 2節で見た日本語の様々な現象からも明らかなように、現実以外の事態をさすのは、過去形というテンス独自の働きではなく、未完了アスペクトもそうした働きに加担するが多い。つまり、過去形テンスにおいても、未完了アスペクトにおいても、時間から可能世界へという意味拡張が見られるわけだが、非現実の事態への言及を可能にするメカニズムには、それぞれで微妙な違いがある。状態性アスペクト、ひいては未完了アスペクト一般は、第3節で見たように、話者の視点である基準時(発話時と重なる場合も含めて)以外の時点を含むという時間的特徴を持っているが、これは話者の時点(発話時)を除外するという(55)の過去形の特徴とはちょうど逆の方向に働くものと考えられる。具体的には、Iatridouが提案しているのと同様に、時間を可能世界に置き換えれば、状態性アスペクト、その他の未完了アスペクトの特徴として(58)のような包含特徴(inclusion feature)が仮説として自然に導きだされてくる。

(58) Inclusion feature (InclF) for imperfective aspect (states, habituals, generics):

Topic (x) (the x that we are talking about) includes non-S(x) (x that are not of the speaker at speaker's time of reference¹²), where x is a variable ranging over both times and worlds.

未完了アスペクト(状態性、反復性、総称性アスペクト、等)の包含特徴(InclF):
Topic (x) (当面の話題になっているx) はnon-S(x) (基準時における話者のx以外のもの)を包含する。xは時間、可能世界の両方にわたる変数である。

¹¹ (57) は金水敏(個人談)による例である。

¹² Iatridouが提案している過去形のexclusion featureではS(x)が発話時における話者のxをさすのに対し、ここで提案する未完了アスペクトのinclusion featureのS(x)は話者の視点となっている基準時全般(発話時と重なる場合も含めて)をさしている。その点、このinclusion featureはIatridouのexclusion featureより広く適用されるものである。過去形の場合、除外される時点は発話時のみで、基準時となっている過去の基準時点そのものは、当然ながら、当面の話題から除外されないからである。それに対して未完了アスペクトのinclusion featureは、発話時と重なっているか否かに関わらず、基準時点以外の時点が包含されるとするものである。

(58) の包含特徴は、話者の時間や世界を明示的には排除していないことに注意されたい。もしそれが排除されれば、現実の世界以外の、反事実的な意味しか生じないはずであるが、第1, 2節で見た通り、状態性が関わる仮定的な意味には、言及される事態が現実の世界で生じるかどうか不確かで、その可能性が明示的には排除されていない場合が多い。ただ、現実以外の世界を含むという状態性アスペクトに加えて、現実の世界を除外する過去の形が加われば、(53), (54), (56), (57) のように、現実以外の事態しか含まれない、純粋な反事実的な意味が生じる。

以上のように、状態性と仮定性の関連性は、話者の時点（基準時）以外の時点を含む、時間的な複数性から、話者の（現実の）世界以外の世界を含む、可能世界における複数性への意味拡張によって説明される。状態性そのものが非現実的な事態をさしているとはまでは言えないにしても、状態性は現実の世界から、それ以外の世界への言及を促進する橋渡しの性質を備えているのである。複数の時点が関わっている時間的な意味を表すもので、複数の可能世界への意味拡張が見られるのは、実は状態性アスペクトの言語形式に限られるものではない。次節ではこうした意味拡張が見られる他の言語形式をいくつか取り上げることにする。

5. 時間的複数性が可能世界の複数性につながる諸現象

複数の時点における事態の発生を表す一方で、話者以外の可能世界が想定される仮定的な意味を表す言語形式が、状態表現以外にも日本語には少なからず存在しており、時間的な複数性が可能世界の複数性につながりやすいことを裏付けている。まず、条件接続詞の「～バ」がその一例である。第2節で見たように、「～バ」によって接続される条件文は前件・後件ともに仮定性の高い事態を表す。例えば、「～タラ」、「～ト」に見られる過去の事実的用法は「～バ」では許容されない。

(59) 薬を飲んだら／飲むと／*飲めば元気になった。

ただし、この制約が緩められて、「～バ」が事実的な場面でも許容される、一連の例外がある。それは(60)–(62)のように繰り返し起こる事態の場合である。

(60) まだ独身の頃、毎日仕事が終われば会社の連中と一緒に飲みに行ったものだ。

(61) これを食べればそれ、それを食べればあれ、というように次から次へと口にほおぼっていった。

(62) 愛犬のポチは（いつも）主人の姿を見れば飛んでくる。

(60)–(61) は、過去に実際起こった事態、(62) は過去から現在に至るまで、実際起こっている事態を表している。いずれも、言及事態の発生が一回的ではなく、複数になっている場合である。さらに、(59) のように事実的な場面で、一回的な意味合いでは許されない

い「～バ」でも繰り返し起こるという解釈を生じさせる「いつも」などの要素が伴えば、それが明示的であれ、潜在的であれ、より座りのいい文になる。

(59') (いつも) 薬を飲めば元気になった。

仮定的な意味を表すはずの「～バ」において、繰り返しの事態なら事実的用法が許容されるという事実は、前節で述べた仮定性と時間的複数性の関連性を顕著に表す現象である。ちなみに、これが日本語特有の現象でないことは、英語の*would* という補助動詞にも、仮定性と反復性の二通りの用法があることからもうかがえる。

(63) I *would* gladly leave this job if I got an offer elsewhere. (仮定的)

他から就職の口がかかれば迷わずに今の仕事を辞める。

(64) During my college years I *would* go out drinking every weekend. (反復)

大学の頃、毎週週末になれば飲みに行ったものだ。

時間的複数性が仮定性につながる現象は、「～テモ」構文にも見られる。「～テモ」構文も、「～バ」の場合と同様に、その事実的な用法においてはある出来事が繰り返して発生するという解釈を強いらられる。

(65) 洗っても洗っても汚れは落ちなかった。

(66) どんなにいいものをあげても喜んでくれなかった。

(65)–(66) からも分かるように、「～テモ」文における時間的複数性は、ただ単にある事態が繰り返して起こるだけでなく、それに伴い一定のスケールに沿ってある属性がその度合いを増していく——例えば、(66)にあるような「贈り物のよさ」——という特徴を持っている。そうしたスケールが、今度は現実世界からの距離という解釈に転じれば、当面の話題に関連して想定しうる最も現実から離れた可能世界を想定してでも、という「譲歩的条件文」特有の仮定的な解釈が生まれる。

(67) 雨が降っても試合は予定通り行われる。

(68) 人間はたとえその全財産を投じてでも幸福を買うことはできない。

こうした現象は、「～テモ」に形態上の類似性を持つ「～テハ」構文にも見られる。実際に起こった事態を表す限りにおいては、「～テハ」には(69)–(70)のように、繰り返しの意味解釈が常に伴う。

(69) パーティーに必ず来ては食べられるだけ食べて帰った。

(70) 食べては寝る、食べては寝る、という毎日を送っている。

それと同時に、(71)–(72) のように、現実以外の事態を想定しての、条件文相当の仮定的な用法も兼ねている。

(71) 今のことを先生に話されては困る／大変なことになる。

(72) 最終バスに乗り遅れては帰りようがない。

現代日本語における「～テハ」の仮定的な用法は、好ましくない事態を想定した場合に限られるが、歴史的にはそのような制約がなかったことは、(73) のように、より古い時代の用法を残していると考えられる諺的な表現には、そうしたマイナスな響きは一切ないことから分かる。

(73) 郷に入っては郷に従え。

以上のように、言及される事態が一回のみに留まらず、繰り返し、複数の時点において生じるという意味が転じて、現実の世界に留まらず、それ以外の世界も含めた、複数の世界のいずれかにおける発生を想定するという解釈が生じることは、前節で見た状態性アスペクトだけでなく、もう一つの未完了アスペクトである反復性を表す構文にも確認できる現象である。未完了アスペクト一般においてこうした意味拡張が可能になるのは、前節で提案した未完了アスペクトの包含特徴、つまり話者の視点になっている基準時だけでなく、それ以外の時点においても言及の事態が生じるという時間的複数性によるものであると考えられる。話者が視点にとっている基準時そのものが、必ずしも瞬間的でない場合があるにしても、基準時が瞬間的に設定されていると、こうした働きが最も鮮明に見えてくるだろう。例えば、(74) のように、発話時という瞬間から「本屋がある」という状態が捉えられている場合、「本屋がある」のは、発話以外の時点でも成立することとして解釈される。

(74) 今立っているところの向かい側に本屋がある。(基準時 = 発話時)

同様に、(75) では、話者の視点（基準時）が「12時になる」という過去の瞬間的な出来事の発生時によって設定されているが、「～テモ」の反復性により、基準時以外の時点においても、「X時になる」(X=12時以前の時点) という出来事が複数起こっているという解釈が生じる。

(75) 夜12時になっても、子供は帰ってこなかった。(基準時 = 過去の「12時になる」の発生時)

このようにして、話者以外の時間が想定されるという時間的複数性が、話者以外の世界が想定されるという可能世界の複数性につながる。これは、状態性アスペクトだけでなく、未完了アスペクト一般の特徴であり、現実性に対する把握と時間に対する把握がいかに密

接に関わっているかをさらに裏付けるものである。

6. 結び

日本語では、現実の世界以外の事態を想定する仮定的な意味が、状態性や反復性といった未完了アスペクトに関わる言語形式によって表現される傾向が目立つ。本論では、時間的な意味を表す言語形式と現実性に関わるモーダルな意味の間にこのような関係が成り立つ理由を、言及事態が、話者の視点になっている時点（基準点）以外の時点においても生じるという未完了アスペクトの「時間的複数性」に求めてみた。話者の時点以外の時点を想定する時間的な解釈が、話者の世界（現実の世界）以外の世界を想定するモーダルな解釈に転じることが、仮定的な意味の、少なくとも一つの根源であるという分析を提案したのである。もしこの分析が正しいなら、未完了アスペクトは, Iatridou (2000) の提案する、話者の時点, 転じて話者の世界を当面の話題から除外するという過去形の働きとは、ちょうど逆の働きを演じることになる。さらに、話者以外の世界を包含する未完了アスペクト、一方では話者の世界を除外する過去形のテンスの、こうしたモーダルな働きが重なると、話者以外の世界のみを想定する、仮定性の最も純粋な反事実的な意味が生じる。アスペクトとテンスのこうした相互作用が日本語やギリシャ語といった歴史的に無関係の言語に見られるのは、こうした観点から考えると単なる偶然とは言えないだろう。

反事実性という仮定的な意味解釈を導きだす要因として、これまでの条件文の研究の中では、インド・ヨーロッパ系の言語における過去形の役割がしばしば指摘されて来たのであるが、本論で提案したように、少なくとも一部の言語では未完了アスペクトもそうした解釈を導きだすことに加担している。だとすれば、現実・非現実というモーダルな意味を形式化する上でいかに時間的な範疇が密接に関わっているかが益々浮き彫りになってくる。また、仮定性を導きだすそうした意味要因を特定することによって、条件文イコール仮定性という従来の方程式が見直され、条件文においては様々な度合いの仮定的意味、とりわけ日本語のように仮定性に欠けている事実的な用法までも、条件文のれっきとした意味領域として認められる余地が生まれてくる。本論で考察した時間と現実性の相関関係が日本語以外の言語においてどれだけ広範囲に観察される現象であるかが、条件文の定義そのものにも関わる根本的な課題として、今後の研究によって徐々にその有様が明らかになってくることが期待される。

参考文献

- Akatsuka, Noriko (1985) Conditionals and epistemic scale. *Language* 61: 625–639.
有田節子 (2007) 『日本語条件文と時制節性』東京：くろしお出版。
Carlson, Gregory (1989) On the semantic composition of English generic sentences. In: Gennaro Chierchia, Barbara Partee and Raymond Turner (eds.) *Properties, types and meaning*, Vol.2, 167–192. Dordrecht: Kluwer.
Comrie, Bernard (1986) Conditionals: A typology. In: Elizabeth Traugott, Alice Ter Meulen, Judy Reilly and

- Charles Ferguson (eds.) *On conditionals*, 77–99. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fujii, Seiko Yamaguchi (1990) Counterfactual concessive conditionals in Japanese. In: Hajime Hoji (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 1, 353–367. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Hasada, Rie (1997) Conditionals and counterfactuals in Japanese. *Language Sciences* 19(3): 277–288.
- 蓮沼昭子 (1993) 「[たら]と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志 (編) に収録, 73–97.
- Iatridou, Sabine (2000) The grammatical ingredients of counterfactuality. *Linguistic Inquiry* 31(2): 231–270.
- ヤコブセン, W. M. (1990) 「条件文における「関連性」について」『日本語学』9(4): 93–108.
- Jacobsen, Wesley M (1996) Time, reality, and agentivity in Japanese negation. In: Noriko Akatsuka, Shoichi Iwasaki and Susan Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 5, 169–186. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Jacobsen, Wesley M (1999) Aspects of hypothetical meaning in Japanese conditionals. In: Akio Kamio and Ken-ichi Takami (eds.) *Function and structure*, 83–122. Amsterdam: John Benjamins.
- Jacobsen, Wesley M (2001) On the interaction of temporal and modal meaning in Japanese conditionals. In: Noriko Akatsuka, Susan Strauss and Bernard Comrie (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 10, 3–17. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Jacobsen, Wesley M (2002) Multiple times and multiple worlds: Modal and temporal meaning in BA, TEMO, TEWA, and NARA conditionals in Japanese. In: Patricia Clancy (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 11, 352–366. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Jacobsen, Wesley M (2007) Reference time, temporal adverbials, and the tense/aspect interface in Japanese. In: Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani and John C. Smith (eds.) *Current issues in the history and structure of Japanese*, 1–26. Tokyo: Kurosio Publishers.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15 (金田一 (編) 1976 に収録, 5–26).
- 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』東京: 麦書房.
- Klein, Wolfgang (1994) *Time in language*. New York: Routledge.
- 小出慶一・小松紀子・才田いずみ (1981) 「ト・バ・タラ 談話における選択要因を求めて」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』4: 30–66.
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge: MIT Press.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』東京: 大修館書店.
- 益岡隆志 (1993) 「条件表現と文の概念レベル」益岡隆志 (編) に収録, 23–39.
- 益岡隆志 (編) (1993) 『日本語の条件表現』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (編) (2006) 『条件表現の対照』東京: くろしお出版.
- 坂原茂 (1985) 『日常言語の推論』, 認知科学選書2. 東京: 東京大学出版会.
- 田窪行則 (1993) 「談話管理理論による日本語の反事実条件文」益岡隆志 (編) に収録, 169–183.
- Vendler, Zeno (1957) Verbs and times. Reprinted in Zeno Vendler (ed.) *Linguistics in philosophy* (1967), 97–121. Ithaca: Cornell University Press.

ウェスリー・M・ヤコブセン (Wesley M. Jacobsen)

著者の所属:

ハーバード大学教授

国立国語研究所客員教授 (2010.08–2011.03)

著者の略歴:

学位: シカゴ大学博士号 (言語学, 1981年)

主な職歴: ミネソタ大学東アジア研究科助教授 (1981年~1985年), 准教授 (1985年~1993年), ハーバード大学東アジア言語文明科教授 (1993年~現在)

主要な著者・論文:

On Japanese and how to teach it: In honor of Seiichi Makino. (coedited with Osamu Kamada). 1990. Tokyo: Japan Times, 273 pp.

The transitive structure of events in Japanese. 1992. Tokyo: Kurosio Publishers, 284 pp.

Aspects of hypothetical meaning in Japanese conditionals. In: *Function and structure* (eds. Akio Kamio and Ken-ichi Takami). 1999. Amsterdam: John Benjamins, pp. 83–122.

On the fuzzy boundary between tense and aspect in Japanese. In: *Polymorphous linguistics: Jim McCawley's legacy* (eds. Salikoko Mufwene, Elaine Francis and Rebecca Wheeler). 2005.

Cambridge, MA: MIT Press, pp 261–282.

Reference time, temporal adverbials, and the tense/aspect interface in Japanese. In: *Current issues in the history and structure of Japanese* (eds. Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani and John C. Smith) . 2007. Tokyo: Kurosio Publishers, pp.1–26.